

①学校教育の問題

以下、二つの大きな問題

- ・トップ層のエクステンション教育の未然
- ・下位層のリメディアル教育の未然

①欧米は、トップレベルの少数精鋭型エクステンション



■アメリカのエリート大学

	学部生	1学年
スタンフォード	6,600	1,650
ハーバード	6,600	1,650
MIT	4,480	1,120
イェール	5,300	1,325
プリンストン	4,800	1,200
5大学合計	27,780	6,945

5校足しても慶応1校以下。
早稲田の6割にしかならない。



早稲田	45,000	11,000
慶応	29,000	7,250



■フランスのグランゼコール

200校合計
1校AV



夏目達也教授 名古屋大学高等教育センター 教授

少数精鋭型のグランゼコールですが、この中で、本当のエリートとなれるのは、上位1割程度でしょう。



五十畑浩平 香川大学研究戦略室 特命助教

グランゼコールのインターンは経営直結型と言いますが、これも一部上位校のみで、あとはコピー取りに書類管理などの雑務です。

- 日本の大学は余りにも規模が大きく、少数精鋭型のきめ細かなエリート教育ができない。
- 欧米の場合、トップ0.5%の戦略的強化が進む。日本の「全員一律型」の底上げでは弱い。

②中下位大学生の著しい学力劣化状態

※週刊ダイヤモンド 2011年12月10日号

大学のホームページで「アルファベットの書き方」「分数の計算」「原稿用紙の使い方」といった授業のカリキュラムを公開した日本橋学館大学(千葉県柏市)が話題を呼んでいる。入試の偏差値は30台で、一部週刊誌には「バカ田大学」とまで書かれたほどだが、学力低下が著しい日本の大学生の実情を正面から受け止めた英断と称賛する声もある。

日本の大学教育の現状に一石を投じた同大の横山幸三学長を直撃した。

日本橋学館大では1年生を対象に、「アルファベットの書き方・読み方」などのカリキュラムを実施。教材は「学研ニューコース 中学(1-3年)英文法」といった中学生向け参考書だ。同様に、数学も「小数の計算」「分数の計算」「比例・反比例」といったカリキュラムが並ぶ。国語は「正しい仮名遣いと送り仮名の練習」「句読点・表記符号の使い方」といった具合だ。

ただし、これらはいずれも入学直後のテストで点数が低かった学生だけが指導教官の薦めで受講する選択科目。「アルファベットの書き方・読み方」も、最近の中学高校では教えない「筆記体」の話だ。ところが、このカリキュラムをHPで公開したため、ネット上は話題騒然。

「高卒のほうがマシだ」「何のために大学行くのか」といった意見が相次ぎ、一部週刊誌が「本当にあった『バカ田大学』」などと報じる騒ぎになってしまった。

思わぬ形で「知名度」を上げた格好だが、こうした声と同大の横山学長は強く反論する。「批判は甘んじて受けますが、なぜ本学がこのような選択科目を用意したのか。それは、中学高校で(基礎教育が)先送りされてきたツケのためです。本学は、学生を社会に送り出す「最後の砦」として責任を果たします。表面だけをとりえてバカにするのは簡単ですが、これが日本の教育の縮図と考えれば、決して笑ってばかりもいられないはずだ」

少子化で、日本の大学はどこも受験生集めに苦労している。日本橋学館大では遠方の受験生に対し、教員が出向いて地元の高校や公共施設などで人物評価を主としたAO入試を実施する「訪問入試」まで行っている。合格判定は、高校の成績や卒業認定基準をもとに行うが、その結果、入学後に冒頭のような“特別授業”を実施せざるを得なくなる。授業にはいずれも、ベテラン教員を配置しているという。

漫画「天才バカボン」のババが通っていた「バカ田大学」と実情はまるで異なるわけだ。大学ジャーナリストの石渡嶺司氏も次のように言う。

「実際には、日本の大学生の4割は似たような状況。上位校でも推薦やAO入試で入った学生は、日本橋学館大を笑えないでしょう。体裁を気にして、こうした授業を正規のカリキュラムの枠外でこっそり行う大学が多い中、むしろよく決断したと称賛してもいいくらいです。学生や親御さん、出身高校からは必ず感謝されるはずですよ」

同大では、入学後の必修ゼミも「履修指導(時間割を作ってみよう)」「親睦球技大会(仲間と汗を流そう)」「学生生活マナー(授業の受け方、ノートの取り方)」と、まさに手取り足取りだ。少々甘やかすすぎの感もあるが、横山学長は「学生が居心地良く、生き生きと大学時代を過ごすためバックアップしているだけ」と胸を張る。

同大の学生も、今回の騒動を気にしている様子はない。「偏見を持つ人の評価は気にしない」「日々の学校生活が充実しているから、何を言われても気にしない」「学歴コンプレックスがある人ほど、バカにするんじゃないですか」と、総じて前向きだ。

こうした学生の“評価”に、横山学長も自信を深めている。

※週刊ポスト2011年10月28日号

入学初年度の履修科目である「基礎カリテラシー」として、英語は「アルファベットの書き方・読み方」などのシラバスを公開し、「簡単すぎる」とネット上を中心に話題となった日本橋学館大学。横山幸三・学長(72)が同大学の教育が狙うところを語った。

本学の「基礎カリテラシー」は、「リメディアル教育」という考えに基づくものです。

「リメディアル教育」とは、学力の低下している学生に、正規の授業やゼミとは別に中学・高校レベルの補習授業を行ない、学び直させるもので、近年は難関大学を含め、実は多くの大学が採用しているのです。

他大学では、就職に備えるため、就職課が高校レベルの試験問題を配布したり、数回の特別授業で済ませたりする付け焼き刃的な内容が多く、基礎学力強化に繋がっているとは思えません。しかし、本学ではシラバスを公表したうえで、単位修得を要する科目として設定しました。

スタートは3年前ですが、実は今年の2月には、案の定、「大学で教える内容か」とのご批判を受けていました。その時には教授会で、「やはり隠したほうがいい」という意見も出ましたが、教えている事実を隠す必要はない。むしろ本学では基礎学力を教えていることを“売り”にしようと思ったのです。

まず、入学時に国語、英語、数学の主要3科目の基礎力テストを実施します。その結果を受けて教員が面談を行ない、必要と判断された学生に受講を促します。

試験で学力を把握することで、「あ、この子は中学時代の躓きで英語嫌いになったんだな」など、指導教員にも発見があり、適切な履修指導が可能になる。そうして学生と話し合うことで、なぜ英語を一から学ぶ必要があるのかを学生に納得してもらおうのです。

当初は教職員にも戸惑いがありました。専門知識を指導すべき大学教員が、アルファベットや小数・分数を教えるのですから当然です。

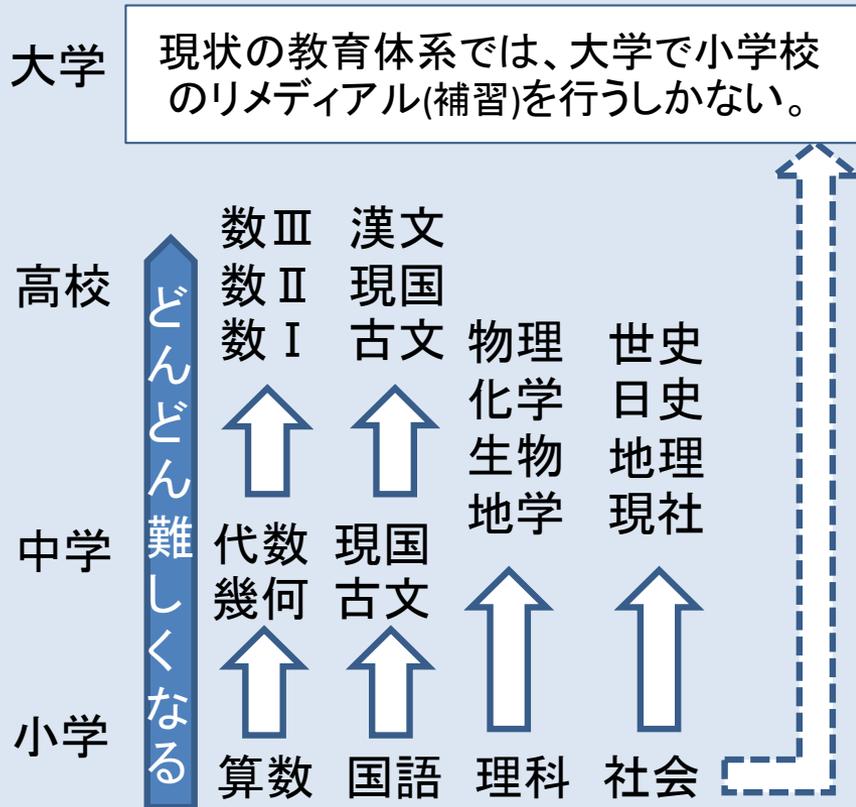
しかしながら反発はありませんでした。なぜなら、「できない」「分からない」という学生に戸惑っているだけでは何も解決しないからです。2年次以降の高等教育をするためには基礎固めが不可欠だということ、そして今の大学生には基礎学力の指導が必要であるということ、皆が教育者として肌で感じていたのだと思います。

■日本橋学館大(にほんばしがつかんだい) <http://www.nihonbashi.ac.jp/>
1904年創立の日本橋女学館中・高(東京都中央区)を運営する学校法人日本橋女学館が母体。2000年開学。リベラルアーツ学部のみ単科大で、総合経営、人間心理、総合文化の3学科。受験者数は一般入試28人(倍率1.08倍)、推薦入試73人、特待生スポーツ21人、AO入試52人。東進ハイスクールの差値37。学生総数689人(男子465人、女子224人)。初年度学費総計140万7000円。

●進学率が高まり、学力不足の大学生が増えている。下位大学はこうした学生の補習を行っている。

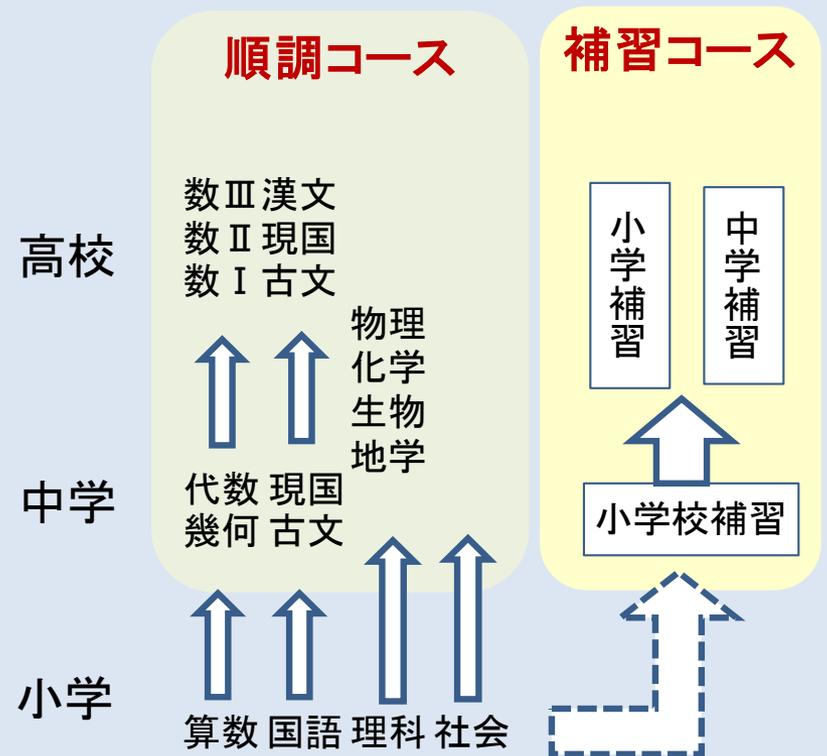
③中等教育の仕組みの変更が必要

■現在の中等教育の問題点



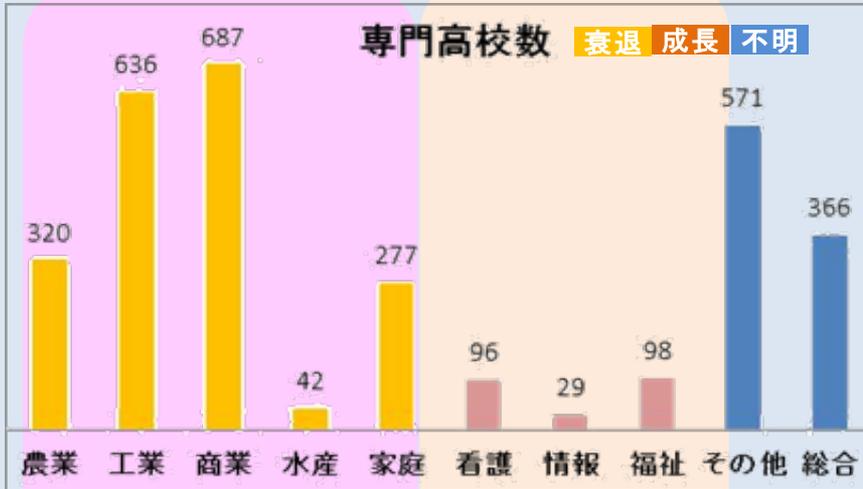
基本的に、内容は難しくなる一方。そのため一度ついていけなくなった人は、そのまま脱落するしかない。

■今後必要なリメディアル・コース



本当は、小学過程がわからない人は中学校で、中学でもわからない人は高校で補習すべきではないか？

④専門高校の問題点



衰退領域が多数

成長領域が不足

+

IT、Web、CAD、デザイン、語学、プレ、放送、通訳、給与・年金計算、書士…

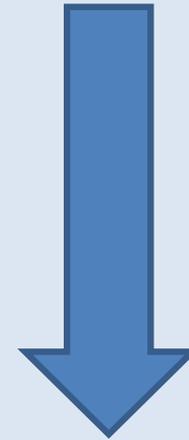
+

リメディアル(小中の補習)

+

大学入試用の選択科目(2~3科目)

「どんどん難しくなる」コースとは異なる専門高校は、カリキュラムが余りにも過去の領域(農林水産工・自営・主婦)が主流になりすぎている。



「総合高校」の新たな姿

- ①必要とされる分野の拡充
- ②小中のリメディアル
- ③上位私大を狙える選択科目

② 欧州型職業訓練の問題

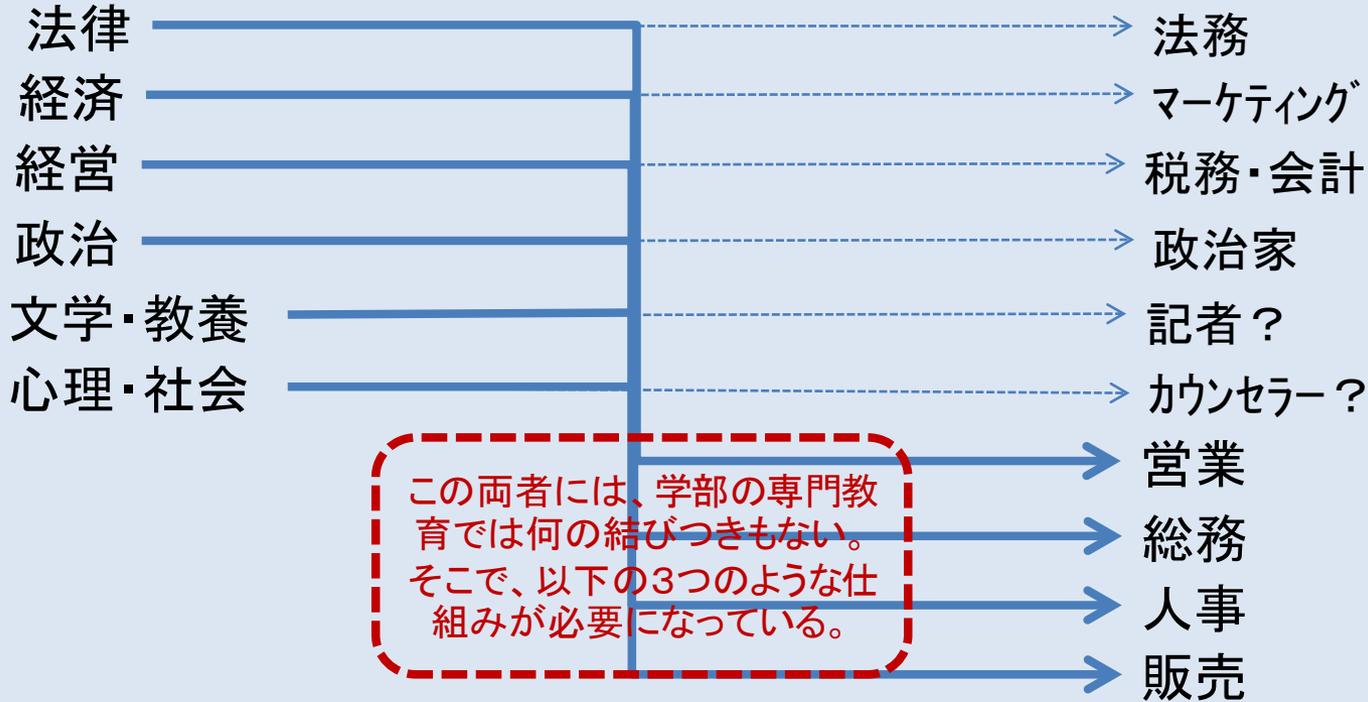
以下、3つの大きな誤解

- ・「学校で職業を教えられる」幻想
- ・「大学の専門が職業につながる」幻想
- ・「職業訓練で職業転換・能力アップ」幻想

欧州では「学校で仕事を教えている」という誤解

近い専攻

近い職務



少数のスペシャリスト

多くの人が就く仕事

- ①大学の職業課程での**長期企業実習**
- ②在学中・卒業後の**インターン**
- ③卒業後の**CFA(見習い訓練)**

結局は「見習い」で覚えている。

学校教育と職業要素の相性

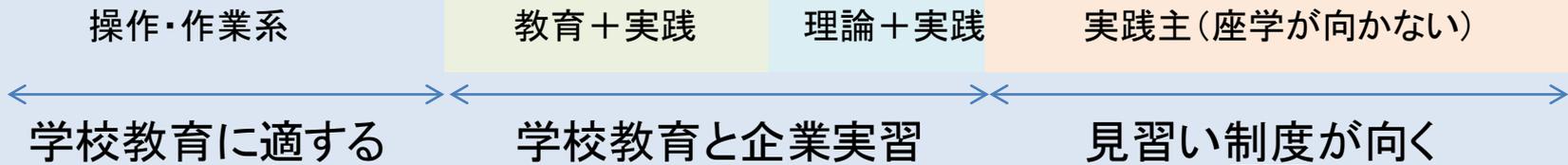
		対人折衝が	
		有	無
対人協力が	有	×	△ (学校での教育+実習)
	無	△ (学校での教育+実習)	○ (学校での教育が適する)

ホワイトカラー職務の多くはここに入る。

フランスもこの基本に従い、職業教育の領域が座学と企業内見習いにうまく別れる。

フランスの職業教育体系とカバー範囲

種別	余り高給が望めない				高給が望める					
	現代社会で減っている				現代社会で増えている仕事					
I (院卒)					<div style="border: 2px solid red; padding: 5px; display: inline-block;"> 専門修士 グランゼコール </div>					
II (大卒)	<div style="border: 2px solid green; padding: 5px; display: inline-block;"> 大学の職業課程(DUEST) </div>									
III (専卒)	<div style="border: 2px solid red; padding: 5px; display: inline-block;"> STS、IUT(専門大学) </div>				CFA(見習い制度)					
IV (高卒)					学校で教えるホワイトカラー領域の多くは、長期インターンでの実習やCFAでの代用となる。					
V (中卒)										
	農林水産工	商店	IT Web	技能(メカ、保守)	販売	医療・介護	事務	エンジニア	経営管理	RNCP(多くの実業)



ホワイトカラー系職の多くは、大学かCFAから企業に派遣され、見習いで仕事を覚える。

フランスの見習い訓練(CFA)の実際

CFA期間中に職業教育を受けたか(%)

	全体	契約経過期間			
		6月未満	6~11月	12~17月	18月以上
はい	35.8	21.9	31.5	45.3	50.4
いいえ	64.2	78.1	68.5	54.7	49.6

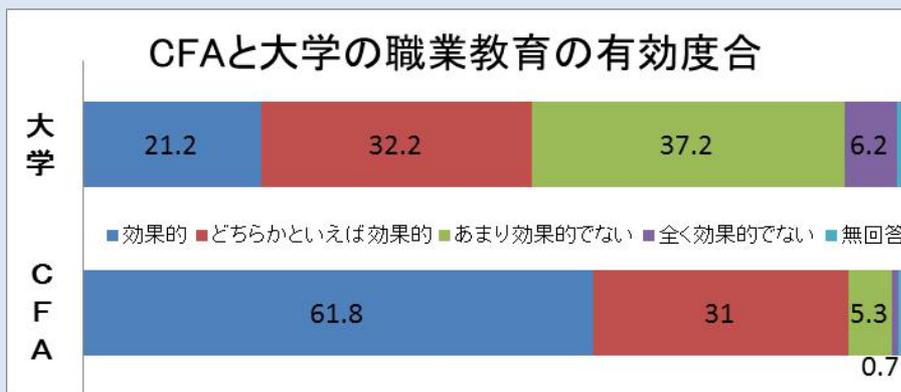
国民教育省ホームページより

CFAに関する肯定的要素・否定的要素(%)

肯定的要素		否定的要素	
経験がつめる	25.7	給与が安い	24.6
接点を持てる	18.5	組織だっていない	19.6
給与が得られる	14.9	進展がみられない	18.3
契約後就職できる	12.7	職業教育の不足	15.7

Bellamy (2002) P5

⇒計画的なOff-JTプログラムは少なく、見よう見まねで覚えているのがわかる。



⇒こうした「徒弟的見習い」でも大学の職業教育よりは、格段に良い評価を得ている。

CFAの報酬基準(数字は最低時給に対する比率)

	16~17歳	18~20歳	21歳以上
1年目	25%	41%	53%
2年目	37%	49%	61%
3年目	53%	65%	78%

⇒ただし、その待遇・給与条件は、かなり厳しい(初年度の時給は700円程度)

結局、ホワイトカラーの初期キャリアは、学校では教育できていない。

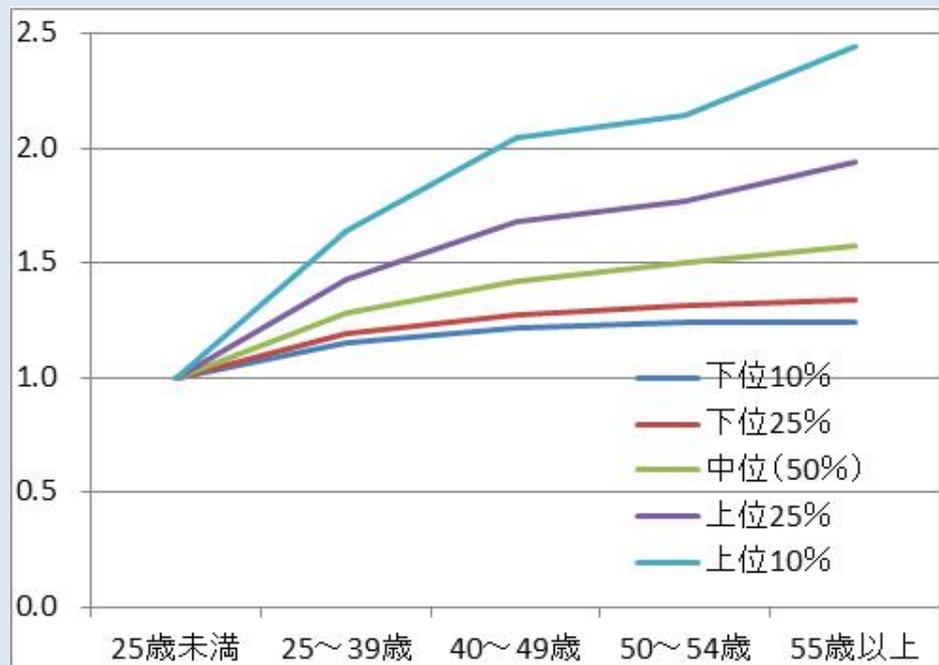
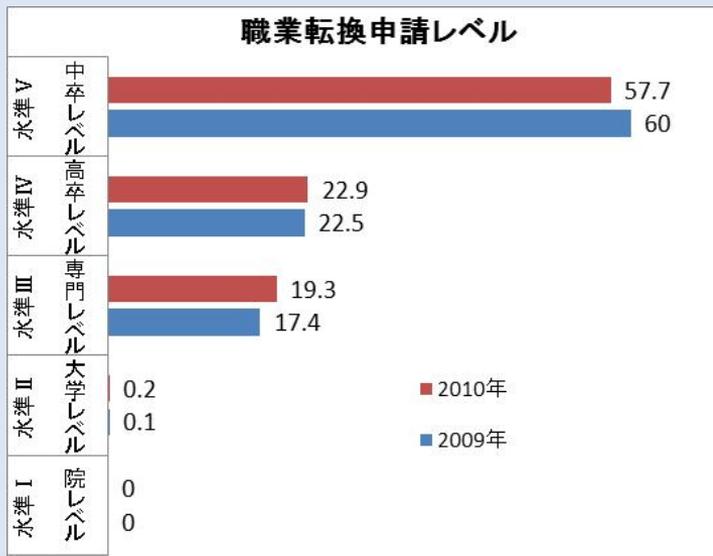
欧州の継続訓練で格差は是正されているか？

AFPA(失業者向け職業t転換訓練)のレベル別申請割合(%)
DARES 2011年

		2009年	2010年
水準Ⅰ	院レベル	0	0
水準Ⅱ	大学レベル	0.1	0.2
水準Ⅲ	専門レベル	17.4	19.3
水準Ⅳ	高卒レベル	22.5	22.9
水準Ⅴ	中卒レベル	60	57.7

フランスの年収分布(単位は€, 2013年、Insee)

	25歳未満	25~39歳	40~49歳	50~54歳	55歳以上	平均
下位10%	12,360	14,300	15,070	15,340	15,370	14,410
下位25%	13,980	16,650	17,830	18,360	18,770	16,940
中位(50%)	15,810	20,320	22,500	23,790	24,910	21,270
上位25%	18,140	25,860	30,530	32,070	35,260	28,560
上位10%	21,160	34,650	43,300	45,380	51,760	40,190



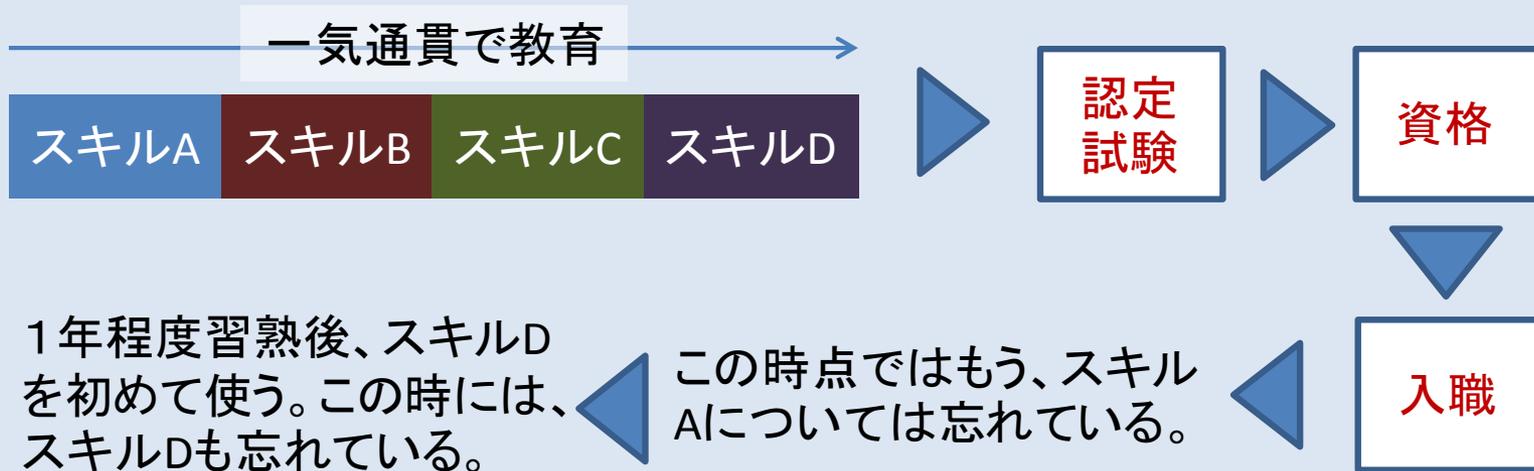
職業転換の主は、中卒レベルの資格であり、低年収者の給与は年功カーブが乏しい。

③ 欧州型職業訓練の良い点

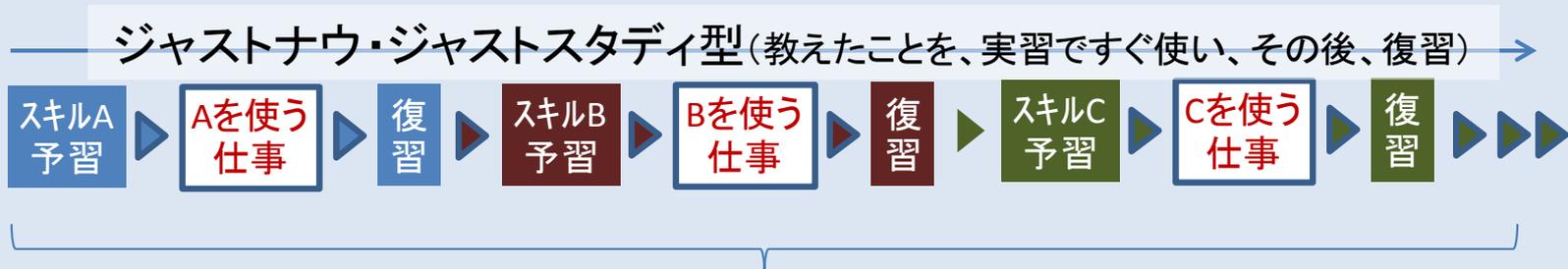
- ・ジャストナウ・ジャストスタディ型
- ・「棚卸し⇒理論化」
- ・実務密着での改廃

ドイツの初期キャリア訓練の長所

■ 日本での「一気通貫」型教育の問題



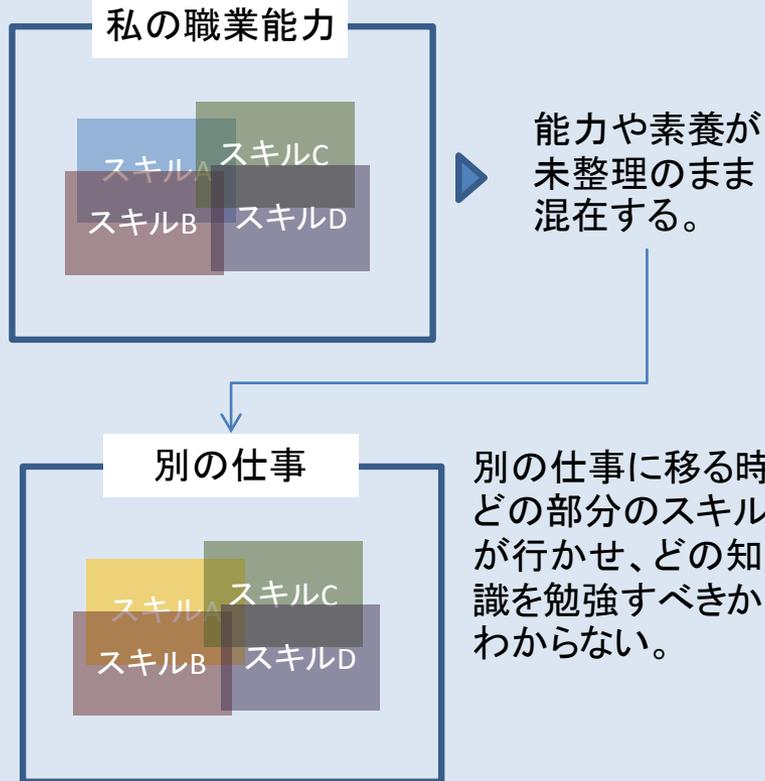
■ ドイツのデュアル・システムの長所



このカリキュラムと実習の連携を、商工会議所が主導して企業と作っている。

フランスの継続キャリア訓練の長所

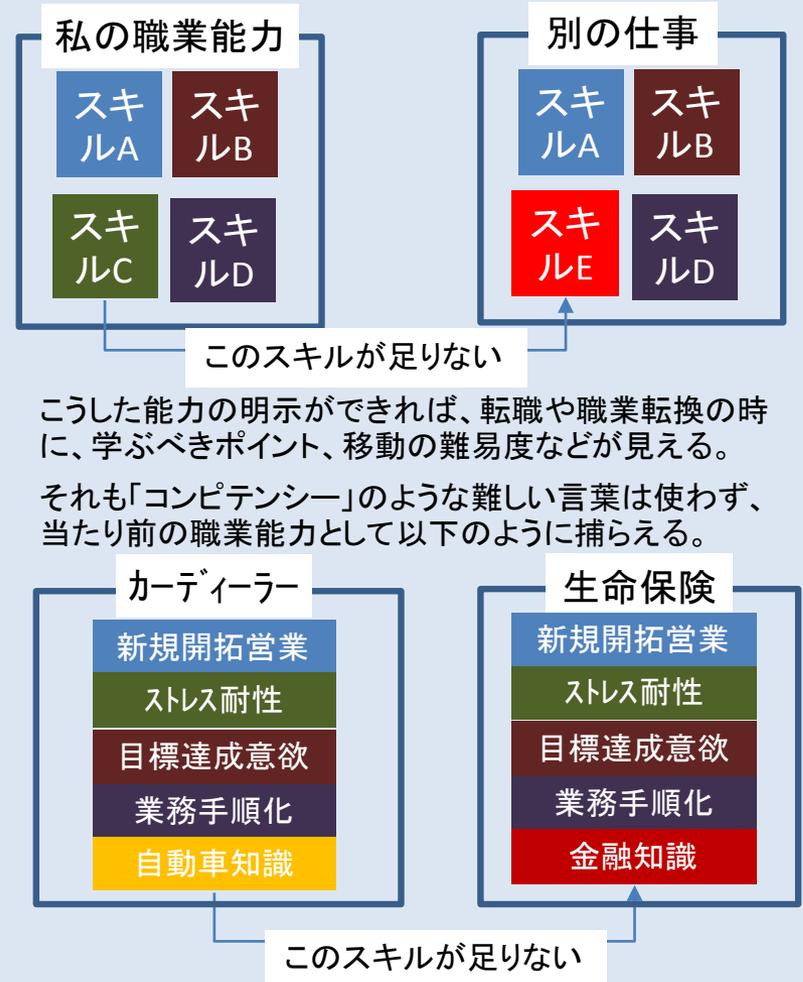
■ 日本での職能



継続教育で、随時、自分の能力を棚卸し・分解・理論化する仕組みが重要。

■ フランスの棚卸と理論化

継続教育により、自分の能力や経験を棚卸し、何ができるか、できないか、がはっきり見えるようにしている。



職業資格のリアルアップデート

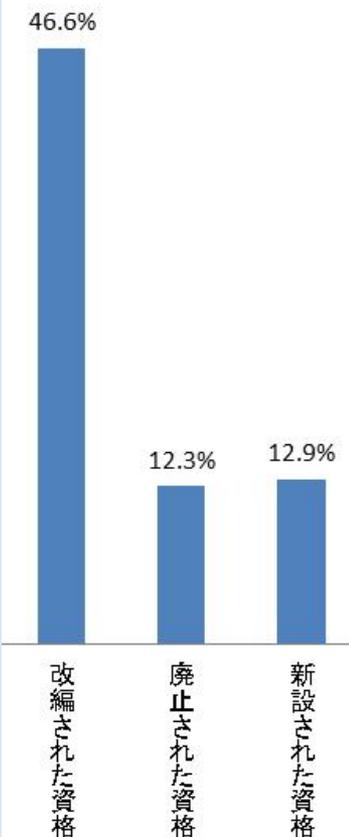
■フランス

RNCPに登録された職業資格総数		CNCP(2011)						
申請後登録された資格	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	手続き中	合計	
無条件登録された資格	2,203	2,682	3,824	3,880	3,707	2,330	6,037	
管轄省庁別内訳	農務水産省	196	199	210	210	211	-	211
	社会活動総局	14	15	15	15	15	15	15
	高等教育研究省	859	1,179	1,714	2,127	2,007	2,180	4,187
	国民教育省	613	640	891	851	675	9	684
	雇用省	291	313	338	354	363	9	372
	青少年スポーツ省	130	145	149	148	148	-	148
	健康省	3	20	10	10	11	-	11
	技師資格(CTI)	97	184	298	165	232	132	364
合計	3,644	4,299	5,506	5,549	5,709	2,385	8,094	

管轄省庁別に資格が集められている様子がわかるだろう。この推移から二つのポイントが見えてくる。一つは、毎年、新たに多数の資格が生まれていること。そのため合計数は着実に増えている。一方で、内訳を見ると、個別省庁では総数が減少を見せる年も少なくない。全体増加の中でも、きっちり見直し廃止を行っている証拠だろう。こうして、現代社会の職務の変化に合わせていることが見て取れる。

■ドイツ

ここ10年間の改廃状況



非常に細かく改廃を進め、現状と齟齬がないようにしている。

本気で日本再生をするつもりなら

- ①日本の大学は大きすぎる(とりわけトップ大学が巨大)。これでは企業密着型のケースワークもインターンシップも、リエゾンも無理(学生の人材レベルが薄すぎて企業が魅力を感じない)。欧米的な超選抜型エリート少数校を作ること。
- ②日本の教育は、脱落放逐型で、リメディアルが中等教育にない。従来の順調コースとは別に、中学と高校にリメディアルコースを作るべき。そうしないと、大学が巨大なリメディアル機関となってしまう。
- ③日本の専門・職業高校はアンシャン・レジームの極み。現代型のニーズを取り入れたシラバスと、リメディアルそして2~3科目特訓型で私大トップを目指す、3つの柱を作るべき。
- ④職業教育においては、「座学が有効な分野」と「実習が有効な分野」をはっきり認識し、実習が有効な分野には、フランスのCFAやドイツのデュアルのような仕組みを作り上げること。
- ⑤継続教育では、能力や経験の棚卸と、理論化を行うこと。その結果、職務転換の時に、今の能力に近い「似た分野」はどこか、そして足りない能力は何か、が明確にわかるようにする。その上に、フランスのGRETAやAFPA的機関を作る。
- ⑥本気で職業資格を作るなら、業界団体や主要企業と組んでリアルなアップデートを行う必要がある。そこまで果たして日本は注力できるか？